

いっ ほん まつ
一本松 遺跡

かんのんいけ
観音池公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1996

きた もろ かた ぐん だかじょうじょう
宮崎県北諸県郡高城町教育委員会

序

この報告書は、高城町が行った観音池公園整備事業に伴い、高城町教育委員会が実施した高城町大字石山字一本松4148番地ほかに所在する一本松遺跡の発掘調査の記録であります。

今回の調査では、縄文時代から古墳時代にかけての数多くの貴重な資料を得ることができました。

特に古墳時代の竪穴住居は、これまでに町内で発見されたなかでは最大級の竪穴住居で、今後の町民各位の歴史研究や文化財保護の向上に寄与することを期待しております。

未筆ながら、今回の一本松遺跡の調査及び整理、本書の作成に際し、多大なるご協力、ご理解を賜った高城町役場、宮崎県教育委員会文化課、宮崎県埋蔵文化財センター、関係各機関、町民各位の皆様方に深く感謝申し上げる次第であります。

平成8年3月

高城町教育委員会
教育長 新地文雄

例　　言

- 1 本書は、観音池公園整備事業（高城町こども村建設）に伴い、平成6年11月1日から12月2日に実施した一本松遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、高城町教育委員会が調査主体となり県文化課主査石川悦雄、同主査永友良典、同主査督付和樹が担当した。
- 3 遺物の復元・実測図・トレースは柄本久子、松浦由美等に協力を頂いた。
- 4 本書の執筆は、白谷、督付、永友が分担し、文責は下記のとおりである。
第1章（白谷）、第2章第1節（督付）、第2章第2節及び第3章（永友）
- 5 本書の編集は永友が行った。
- 6 土器の色調は農林水産省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。
- 7 本書図面の方位は磁北、レベルは海拔絶対高である。

本　文　目　次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	1
第4節 調査の経過	2
第2章 調査の結果	5
第1節 繩文時代の遺構と遺物	5
第2節 古墳時代の遺構と遺物	7
第3章 まとめ	17

挿図目次

第1図	一本松遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	2
第2図	一本松遺跡周辺地形図	3
第3図	一本松遺跡遺構分布図	4
第4図	一本松遺跡出土繩文土器実測図・撮影	6
第5図	一本松遺跡1号住居跡遺構実測図	8
第6図	一本松遺跡1号住居跡遺物出土状況	9
第7図	一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図(1)	11
第8図	一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図(2)	13
第9図	一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図(3)	15
第10図	一本松遺跡土坑遺構及び出土遺物実測図	16

図版目次

図版1	遺跡遠景	19
図版2	調査風景、1号住居跡	20
図版3	1号住居出土遺物出土状況(1)、(2)	21
図版4	1号住居出土遺物出土状況(3)、1号土坑	22
図版5	2号土坑、3号土坑	23
図版6	繩文土器	24
図版7	1号住居出土遺物(土師器1)	25
図版8	1号住居出土遺物(土師器2、須恵器)	26
図版9	1号住居出土遺物(石器)、1号土坑遺物、2号土坑出土遺物	27

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

高城町では町の中心地から北へ約2.5kmほどの所にある観音池を中心とした公園整備事業(観音池整備事業)を昭和46年度から取り組んでいる。町教育委員会でもこの事業に関連して平成4年度、平成6年度にふれあいセンター及びキャンプ場建設事業区内に確認された野中第3遺跡の発掘調査を行っている。

今回対象となった事業区は野外広場及び取り付け道路に係わる地区で、町教育委員会では平成6年10月に事業予定地内の試掘調査を行い、遺跡が所在することを確認した。その結果をもとに町都市計画課と協議を行い、現状保存が困難で削平を行う部分について、記録保存の措置をとることになった。

しかし、町教育委員会では細井地区県営農地保全整備事業に伴う発掘調査を行っており、一本松遺跡の発掘調査に対応が困難であったことから、宮崎県教育委員会文化課に調査員の派遣を依頼した。県文化課では調査員3名を交互に派遣し、平成6年11月8日から12月5日にかけて発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織

一本松遺跡の発掘調査組織は下記のとおりである。

調査主体 高城町教育委員会

教育長 新地文雄

社会教育課長 松田俊夫

同課長補佐 有村修一

同文化係長 田中孝明

調査担当 同主事 白谷健一(庶務担当)

県文化課主査 石川悦雄

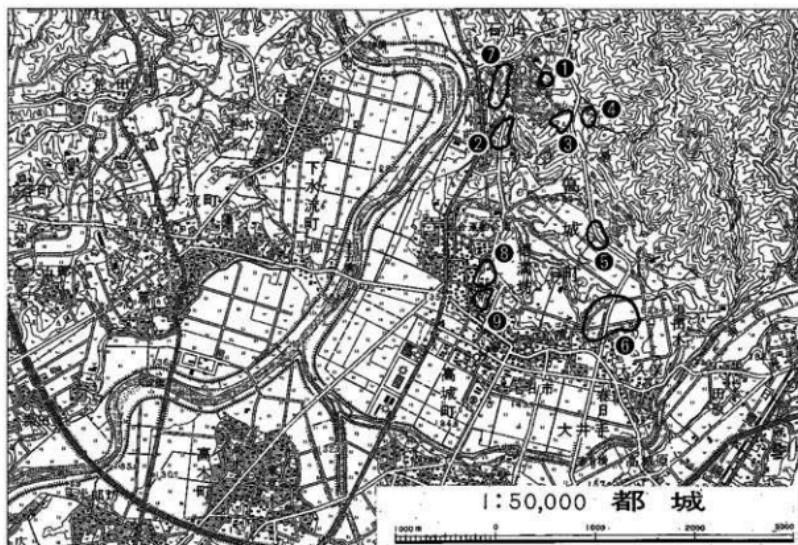
同 永友良典

同 菅付和樹

第3節 遺跡の位置と環境

高城町は宮崎県の南西部に位置する都城盆地の北部にあり、北は野尻町、東は高岡町、山之口町、南は都城市、三股町、西は高崎町に囲まれている。

一本松遺跡は高城町の中心部より、北に約2.5kmほどの所にあり、観音池を中心とする



第1図 一本松遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 1. 一本松遺跡 | 2. 城ヶ尾遺跡 | 3. 野中第1遺跡 |
| 4. 野中第2遺跡 | 5. 永山原遺跡 | 6. 牧の原古墳群 |
| 7. 三俣城跡 | 8. 肥田木城跡 | 9. 雀ヶ城跡 |

台地上の北東に位置している。観音池の以前の呼び名は定満池といい、南東に位置する中池、松山池とともに、享保年間に灌漑池として整備され、穂満坊や石山の田に水を送り続けた。

周辺の遺跡は縄文時代から平安時代の城ヶ尾遺跡、縄文時代から古墳時代の野中第1遺跡・野中第2遺跡、縄文時代から平安時代の永山原遺跡、県指定古墳の牧の原古墳群は少し離れた南東の台地に13基ある。

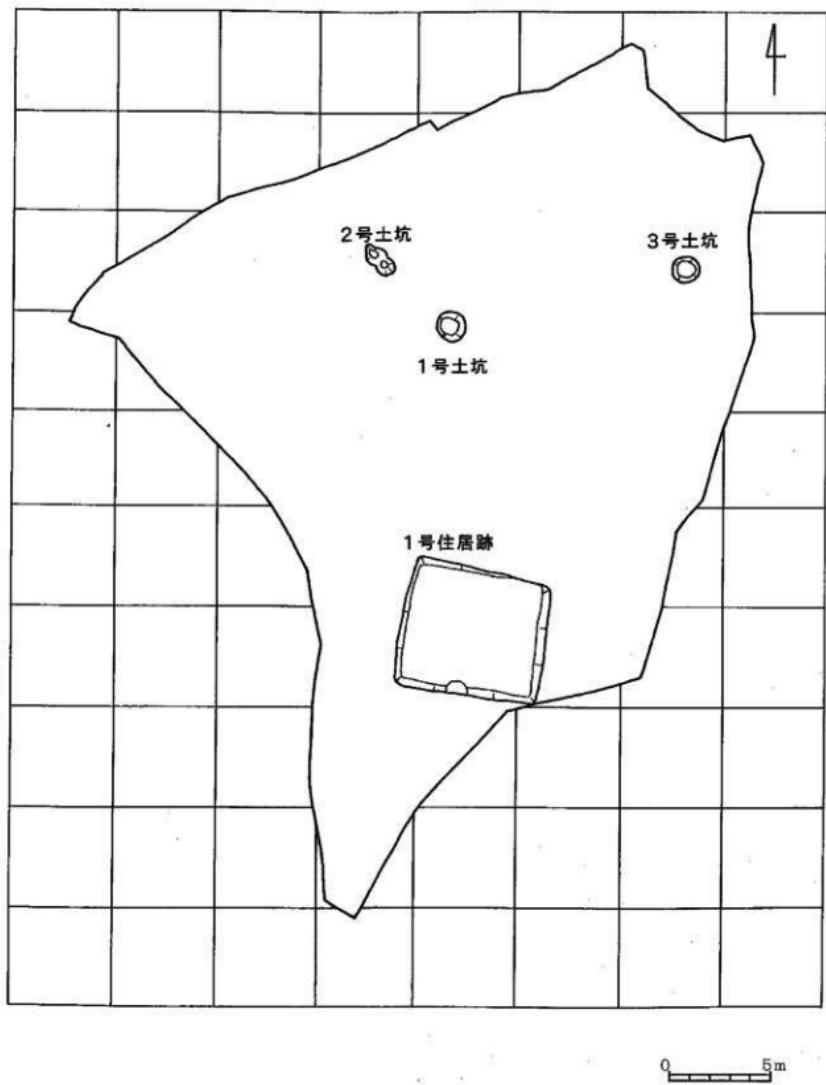
また、観音池を挟んだ西側の台地には三俣城跡、さらにそれから南の方には肥田木城跡、雀ヶ城跡といった中世山城が分布する。

第4章 調査の経過

一本松遺跡は観音池の東岸に位置し、舌状に突き出し比高差5mほどの小台地上に丘陵の先端部にある。調査区は事業区内の約1,000平方メートルを対象とした。現況は杉林であったため、杉の伐採後、ウンボにて表土を剥いだ。杉の根が比較的浅かったことから伐



第2図 一本松遺跡周辺地形図 (1:5000)



第3図 一本松遺跡遺構分布図

根も重機で行ったが、一部表土が浅く後の調査に支障が出たところも見られた。

調査区は山林に近い北東側半分では削平がひどく表土の下は直ぐにボラ層が現れた。しかし、先端部の南西側ではボラ層上層の黒色土層の残りがよく、調査も南西側の精査が中心に行なった。遺構・遺物の検出も南西側に集中した。主な遺構は古墳時代の堅穴住居跡1軒、土坑2基、縄文時代と思われる土坑1基。主な遺物は土師器、須恵器、縄文土器などがあった。

なお、基本土層は表土（I層）、黒色土（II層）、ボラを少し含む黒色土（III層）、ボラを多く含む黒色土（IV層）、御池ボラ（V層）である。

第2章 調査の結果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 3号土坑（第10図）

調査区の北東角で検出された土坑である。遺物は埋土上位で縄文土器片が数点出土している。

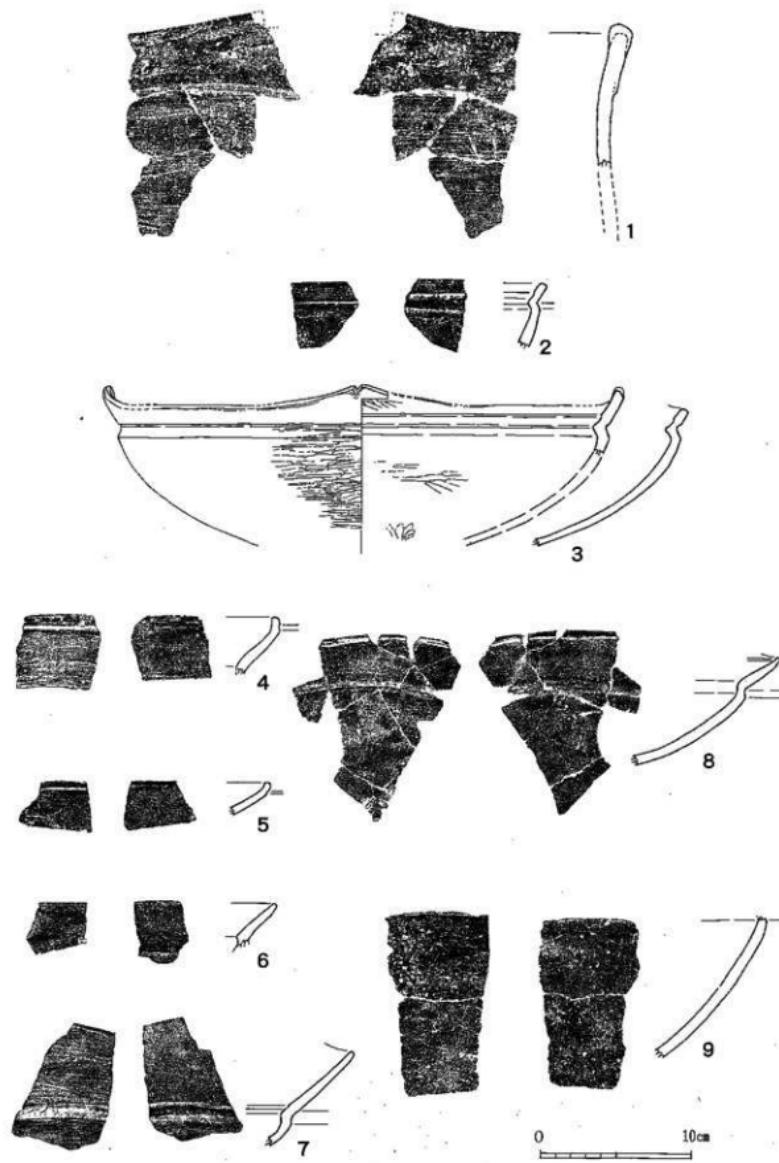
土坑の規模は直径約110cm、床面の直径約78cmの円形の土坑で確認面からの深さは約40cmを測る。

(2) 遺物（第4図）

一本松遺跡の調査対象地区の西側半分には、黒色土（II層）の堆積する谷地形が残存していた。縄文時代の土器は、この谷地形の西端部の御池ボラ層の上のIII～IV層内及び調査地区北東端の3号土坑の埋土上部から出土している。総点数は10点程であるが、図化の可能な9点を報告する。これらは、すべて晩期の土器である。

1は、粗製の深鉢形土器で、錐状突起と思われる肥厚部分が口縁端部に見られる。無文の肥厚した口縁帯を有し、内外面ともに粗いナデ調整を施す。特に胴部は、板状工具によるナデかと考えられる。胎土には、4mm以下の岩片を多く含み、黒色や白色半透明のガラス質の鉱物粒、8mm程度の高師小僧も見られる。外面には、薄くススが付着している。色調は外面が黄灰色、内面が灰黄色である。

2～9は、精製の浅鉢形土器である。頸部以下まで残存している2・3、6～8は胴部屈曲部と頸部の間が短く、いずれも外傾した口縁部には内面に沈線文を持つもの（2・3・7・8）と外面に沈線文を持つもの（4・5）、内外面とも沈線文がないもの（6）などが見られる。このうち、8は外面口縁端部にもはっきりしないが沈線状のくぼみが巡る。胎土色調等その他の特徴については、次のとおりである。2は、外面は横ナデの上



第4図 一本松遺跡出土縄文土器実測図・拓影

を粗い横方向やヘラミガキ、他は横ナデの調整である。胎土に1mm以下の茶色の岩片や黒、透明の鉱物粒などを含み、内外面ともににぶい黄橙色を呈している。3は、内外面とも横ナデの上に横または斜め方向のヘラミガキが施され、外面は明褐灰色、内面はにぶい黄橙色を呈す。胎土に茶色や白の岩片、雲母などの鉱物粒、茶色の高師小僧片等を含む。内外面の一部に黒斑が見られる。低い波状口縁で波頂部には押圧刻みが見られる。4は、内外面とも横方向のヘラミガキが施され、1~2mmの白っぽい岩片、黒色柱状や透明の鉱物粒が含まれる。内外面とも橙色~明黄褐色を呈す。5も内外面とも横方向のミガキが見られ、浅黄橙色を呈する。胎土に茶色の高師小僧片や淡褐色の岩片、黒色や白色半透明の細かい鉱物粒などを比較的多く含む。6は、内外面ともに黒褐色を呈し、横方向のヘラミガキが施される。胎土は粗く、透明な鉱物粒や茶色の高師小僧などが含まれる。7は、内外面ともに横方向のヘラミガキと思われるが、外面は特にヘラの痕跡が顕著である。風化しているのかあまり光沢が見られない。色調は、淡褐色~黄灰色を呈し、胎土に淡褐色や白っぽい岩片、透明や黒色の鉱物粒、茶色の高師小僧と思われるものを含んでいる。内面口縁下部に浅い一条の沈線文が巡る。波状口縁になると考えられる。8は表面の風化が進んでいるが、内外面とも横方向のヘラミガキと思われる。口縁部と底部付近に黒斑が見られるが、色調は内外面とも褐灰色~灰黄褐色を呈している。胎土には、白や茶色の岩片がやや多く見られ、高師小僧と思われるもの、黒色や透明の鉱物粒なども含まれる。波状口縁土器と思われる。9は胴部下半の破片である。表面が剥離したりして風化が進んでいるが、横方向の粗いミガキが見られる。内面が灰黄褐色、外面は上部が暗灰黄色、下部が淡黄色を呈する。胎土には黒褐色や灰色の岩片、白色、黒色、透明な鉱物粒が含まれる。外器面には薄くススが付着している。

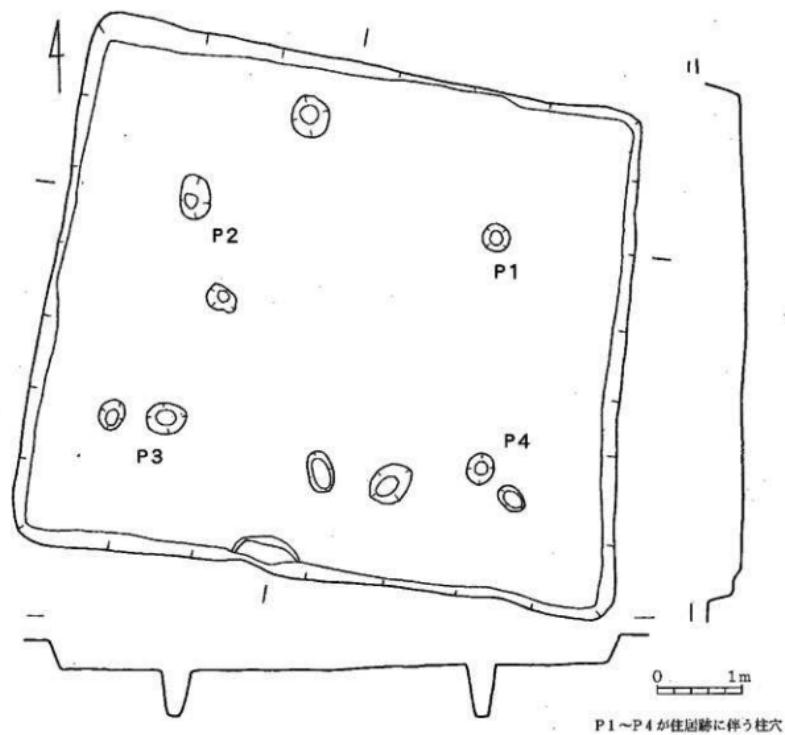
先にも述べたように、これらの土器は、包含層及び3号土坑より出土している。このうち、3・5~8が3号土坑出土で、他は包含層などから出土したものである。

第2節 古墳時代の造様と遺物

(1) 1号住居跡（第5図）

住居跡は調査区の南端部で検出された。確認面はボラ面でボラ混じりの黒色土の方形のプランとして検出された。

住居跡は主軸をN-10°-Eとやや北東にずれる。住居の規模は北壁長660cm、東壁長612cm、南壁長720cm、西壁長644cm、中央部分での東西長685cm、南北長623cmをそれぞれ測るほぼ正方形のプランを呈する。住居跡の確認面からの深さは北壁角で約50cm、南壁角で約40cm、東壁角で約36cm、西壁角で約34cmを測る。柱穴は住居跡内に10本検出されたがその内、住居に伴う柱穴としては住居跡のそれぞれの角に対して対角線上にある4本柱が適當と思われる（P1~P4）。それぞれも柱穴の床面からの深さは、P1の柱



第5図 一本松遺跡1号住居跡遺構実測図

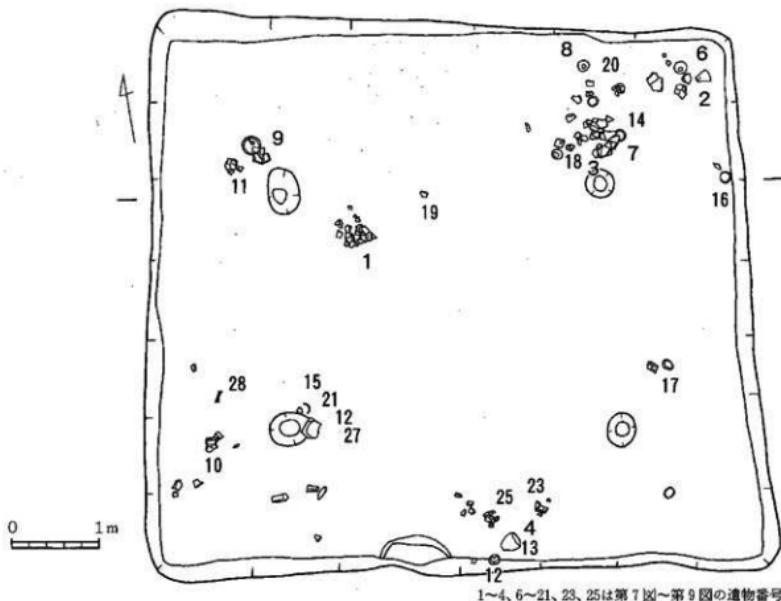
穴が65.2cm、P2の柱穴が62.5cm、P3の柱穴が19.0cm、P4の柱穴が60.0cmである。また、南壁の中央部に床面より若干高い段が確認できた。

遺物は土師器の壺形土器、壺形土器、塊形土器（台付塊を含む）、ミニチュア土器、高坏須恵器の坏身、台石、砥石等の石器が出土している。遺物の分布にはブロックが見られる。南壁際中央部で4, 12, 13, 23, 25等の遺物、南西角で10, 12, 15, 21, 27, 28等の遺物、北西角で9, 11、やや中央部で1, 19の遺物、北東角で2, 3, 6, 7, 8, 14, 16, 18, 20, 26等の遺物、南東側で14がそれぞれ出土している。（第6図）

(2) 遺 物 (第7図～第9図)

1～5は土師器の壺形土器である。

1は住居跡中央部でまとまって検出された土師器の壺である。推定口径約24cm、最大胴部径24.8cm、高さ28.2cmを測る。外面は斜め方向のナデのあと工具による縦方向のナデが施されている。口縁部は斜めのナデで仕上げている。内面は横ナデが施されている。



第6図 一本松遺跡1号住居跡遺物出土状況

頭部には幅2.5~3cm、厚み0.5cmの幅広の貼付突帯がつく。中には斜め方向の刻み目に布目圧痕がX状に施されている。内外面ともにぶい橙色を呈する。なお、外面の胸部中位から口縁部にかけてススが、また、内面底部から胸部中位にかけて炭化物が付着している。

2は住居跡の北東角でまとまって検出された最大径を口縁部のやや下位にもつ土師器の壺である。推定口径約22cm、推定最大径約22.5cm、高さ15.5cmを測る。外面は斜め方向のナデが施されている。内面は横ナデが施されており底部に工具痕が見られる。口縁部はつまみ上げられ口唇部は横ナデで仕上げられている。外面の胸部下位から口縁部にかけてススが付着している。また、内面には一部黒変も見られる。

3は住居跡の北東角で固まって検出された最大径を口縁部にもつ土師器の壺である。口径約27.5cm、高さ24.45cmを測る。外面は斜め方向のナデのあと工具による縦方向のナデが施されている。口縁部は横ナデで仕上げている。内面は底部が横ナデ、胸部が斜め方向のナデのあと工具による縦方向のナデ、口縁部が横ナデでそれぞれ仕上げている。底部内面には指頭痕も見られる。外面は灰黄褐色、内面はぶい橙色を呈するが内外面とも底部が灰色に変色している。また、外面下部から口縁にかけてススが付着する。

4は住居跡の南壁中央の壁際で完形で検出された最大径を口縁部のやや下位にもつ土師器の壺である。口径17cm、最大径18.4cm、高さ19.2cmを測る。内外面、口唇部、底部

ともナデ調整が施されている。内面と口唇部は黒変が見られ、外面にはススが付着する。5は住居跡の埋土及び床面直上で破片が検出されている。最大径を口縁部に持つ。底部を欠き高さは不明である。器形が壺であるが口径約13.6cm、胴部最大径約12.9cmを測る。内外面は斜め方向のナデが施され、胴部上部から口縁部にかけて横ナデが見られる。さらにその部分には縦方向に指ナデ状の痕跡があり内壁に凹凸が見られる。また、頸部と口縁部に中間に一ヶ所直径約8.5cmの粘土の貼付がある。また、口縁部の外面に調整工具の端部の跡が見られる。外面は浅黄色、内面は灰黄色を呈しており、内面には一部黒変も見られる。

6～8は土師器の台付き壺である。

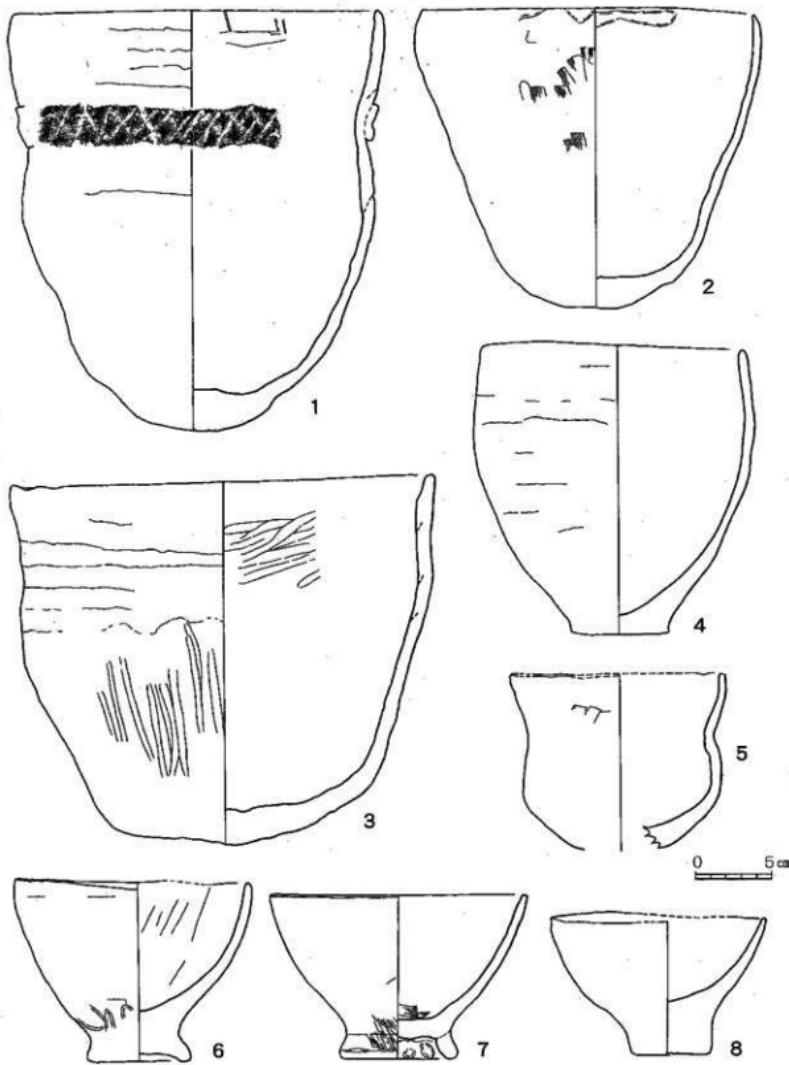
6は住居跡の北東角で2の壺と重なり合って検出された。ほぼ完形である。推定口径約15.3cm、推定の高さ約12.1cm、推定底径約6.6cmを測る。調整は外面が高台端部が横ナデ、高台部から口縁部付近までが工具によるナデのあと指ナデが施されている。内面は工具による横、斜め方向のナデが、口縁部は内外面とも横ナデが施されている。また、高台部内面は工具によるナデが施されている。内外面とも一部に黒変も見られる。

7は住居跡の北東角で3と重なり合って検出された。残存率が3分の2以下と低いが推定口径約16.4cm、推定の高さ約10.8cm、推定底径約7.4cmを測る。調整は外面が高台部が工具によるナデ、胴部が斜め方向のナデで一部工具による横ナデの痕跡もある。口縁部が横ナデで、口唇部もナデ調整が見られる。内面は底部が工具による横ナデと指頭痕が一部残る。胴部から口縁部にかけては横ナデが施されている。また、高台部内部にも指頭痕が見られるとともに粘土の張り付けも見られる。外面はにぶい橙色～浅黄色、内面はにぶい橙色を呈しており、外面には一部黒変も見られる。

8は住居跡の北東角で3の壺や7の台付き壺といっしょに出土した。器形から肥厚した底部を持つ壺とも言えなくはないがここでは台付き壺とした。ほぼ完形で口径14.0cm、高さ約9cm、底径5.1cmを測る。調整は内外面とも工具による斜め方向のナデ外面には一部ミガキのようなナデも見られる。口縁部は内外面とも横ナデで、底部は工具によるナデが施されている。外面は黒変が見られる。

9・10は土師器の壺形土器である。

9は住居跡の北西角でつぶれた状態で検出された。口縁部から胴部下位にかけての部分と底部から胴部上位にかけての部分がそれぞれ復元できたが両者の接合点は見いだせなかった。しかし、同一個体である。口径17.5cm、最大胴部径21.8cm、推定の高さ約23cmを測る。内面は底部から口縁部にかけて横ナデが施されている。また、胴部最大部の内面には指ナデの痕跡が見られる。外面は底部から口縁部にかけて斜め方向の粗いナデ、工具による斜め方向のナデが施されている。口縁部外面は横ナデのあと斜め方向のナデで仕上げている。胴部最大部にはススが付着する。



第7図 一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図(1)

10は住居跡の南西角でつぶれた状態で検出された。周辺からは台石や砾石も出土している。底部を欠くが口径12.7cm、最大胴部径16.5cmを測り、推定の高さは17cmを越す。内面は胴部下位で左右からの斜め方向のナデ、胴部上位から口縁部にかけて横ナデが施されている。頸部内面には工具痕も見られる。外面は胴部下位でナデ、胴部中位から肩部にかけて縦方向のナデ、肩部から口縁部にかけて横ナデが施されている。また、頸部や胴部最大部の外面及び肩部の内面には指おさえのあとがはっきりと見える。さらに、肩部内面には数状の粘土のつなぎの盛り上がりがくっきりと残っている。

11～21は土師器の塊である。

11は住居跡の北西角で9の壺と隣り合わせで出土した。完形であるが底部の半分近くが剥離して底部の状況が不明であるが塊とした。口径は長径が14.45cm、短径が14.0cm、高さは約9cmを測る。調整は内面が斜め方向のナデ、外面が横ナデのあと斜め方向のナデ、口縁部には横方向のナデがそれぞれ施されている。

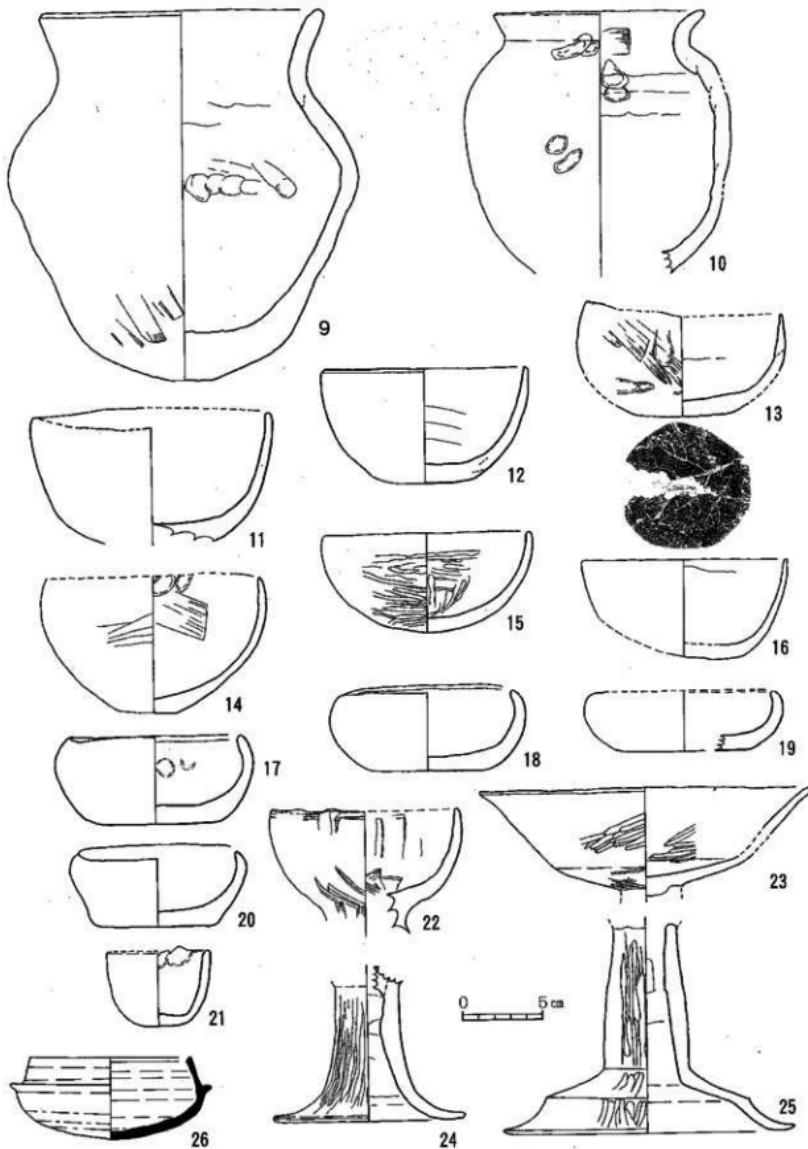
12は4の壺が出土した住居跡の南壁中央壁際の集中箇所と南西角の土器集中箇所の2ヶ所で検出された土器が接合されたものである。口縁部を一部を欠くがほぼ完形である。推定口径は約12.5cm、高さは約9cm、底径5.3cmを測る。調整は内面が幅1cmほどの工具を用いたナデ、外面は底部がナデ、胴部下位が斜め方向のナデ、胴部中位から口縁部にかけて横ナデ、口唇部にナデがそれぞれ施されている。

13は4の壺が出土した住居跡の南壁中央壁際の集中箇所の東側で検出されている。口縁部と胴部から底部を一部欠く。推定口径は約11.9cm、推定の高さ約6.4cm、底径6.4cmを測る。調整は内面が底部でナデ、口縁部にかけて横ナデ、外面は指おさえのあと工具によるナデが全体に施されている。底部は木の葉底である。また、底部にはススが付着する。

14は住居跡の北東角の土器集中箇所で3の壺や7の台付き塊などとともに検出されている。口縁部を一部欠く。推定口径は約13.2cm、推定の高さ約8.5cm、底径は3.3cmを測る。調整は内面はナデ調整、口縁部には指頭痕がみられる。外面は底部がナデ調整、胴部下位が横ならびに斜め方向のナデ、胴部上位から口縁部にかけて横方向のミガキに近いナデ調整が見られる。また、底部から胴部下位の外面にススが付着する。

15は住居跡の南西角の土器集中箇所で検出されている。近くには台石や12の塊の破片も見られる。完形で口径12.8～12.4cm、高さ6.3cmを測る。内外面ともミガキによる調整が見られる。内面は胴部上位で横方向のミガキ、底部で中心から放射状へのミガキ、外面は左右の斜め方向のミガキが見られる口縁部は横ナデ調整が見られる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

16は住居跡の北東角の土器集中箇所の東壁際で検出された。完形である。推定口径は12.7cm、推定の高さ約6.3cmを測る。底部付近が傾いており底径は測定できない。調整は内面から口縁部外面にかけて横ナデ調整、外面は底部までナデ調整が見られる。



第8図 一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図（2）

17は住居跡の東壁中央付近で検出された。完形で口縁部が内湾する器形である。口径は10.6cm、高さ約5.65cm、底径は7.4cmを測る。最大径は口縁部下部にあり12.8cmである。調整は内面で底部がナデ調整、胴部から口縁部にかけて横ナデで調整されている。外面胴部にはススが付着する。

18は住居跡の北東角の土器集中箇所で3の甕などとともに検出されている。完形で口縁部が内湾する器形である。口径は約18.85cm、高さ約5.0cm、底径は7.1cmを測る。調整は内面の口縁部に横ナデが見られるほかはすべてナデ調整である。底部が一部黒変している。

19は住居跡の北東角の土器集中箇所と北西角の土器集中箇所との中間付近で出土した。口縁部から底部にかけて3分の1程度の残存率であるが口縁部が内湾する器形である。推定口径は約11cm、推定の高さ約3.8cmと推測される。調整は内面がナデ調整、外面が底部でナデ調整、胴部で斜め方向のナデ、口縁部で横ナデ調整が施されている。底部で黒変が認められる。

20は住居跡の北東角の土器集中箇所で3の甕などとともに検出されている。完形で口縁部が内湾する器形である。口径は9.85cm、高さ約4.5cm、底径は7.4cmを測る。調整は内面がナデ調整、外面が底部でナデ調整、胴部から口縁部にかけて横ナデが施されている。

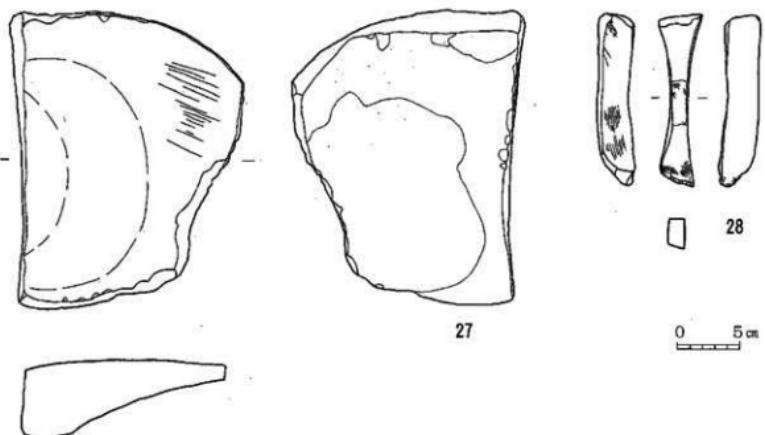
21は住居跡の南西角の土器集中箇所の台石のすぐ横で検出された。ミニチュア土器である。胴部から口縁部にかけて一部を欠くが推定口径は6.15cm、推定の高さ約4.7cm、底径2.8cmを測る。調整は外面から内面口縁部にかけてナデ調整、内面胴部下位で斜め方向のナデ、底部で横ナデ調整が見られる。口縁部の内外面に指頭痕が見られ口唇部がつぶれた状態になっている。

22~25は高坏形土器である。

22は住居跡埋土の上位で検出された高坏の坏部で湾状の器形を呈する。坏部としては完形で、口径は11.5cmを測る。調整は内面でヘラ状工具による横方向のナデ調整、外面も工具による斜め方向のナデ調整、口唇部で横ナデがそれぞれ施されている。また、口縁部外面に粘土をかぶせたような盛り上がりが数ヶ所でみられる。

23は坏部中位で稜をもち口縁部が大きく広がる高坏の坏部である。住居跡の南壁中央壁際の集中箇所で検出されている。坏部としては完形で、口径は20.4cmを測る。調整は内外面ともミガキによる調整が施されている。口縁部の内外面に黒斑らしきものが見受けられる。また、脚部との接合面もはっきりと観察できる。

24は住居跡埋土上位で検出された高坏の脚部である。接合部から脚裾部まで残るが2分の1程度の残存率である。推定の裾部径約12.0cmを測る。調整は外面が縦方向のミガキによる調整、内面は裾部端部が横ナデ、脚部で縦方向及び横方向のナデが施されている。



第9図 一本松遺跡1号住居跡出土遺物実測図(3)

25は裾部に稜をもち裾端部が大きく外反する高坏の脚部である。住居跡の南壁中央壁際の集中箇所で検出されている。脚部を一部欠くがほぼ完形で、裾部径18.1cmを測る。調整は外面がミガキによる調整が施されている。内面は上部から横方向、縦方向、斜め方向、縦方向、斜め方向のナデ調整が施されており、裾部内面は横ナデがみられる。また、ススも付着している。23の坏部と同一個体と思われる。

26は須恵器の坏身の完形品である。住居跡の北東角の土器集中箇所で検出された。口径9.8cm、高さ5.3cmを側る。

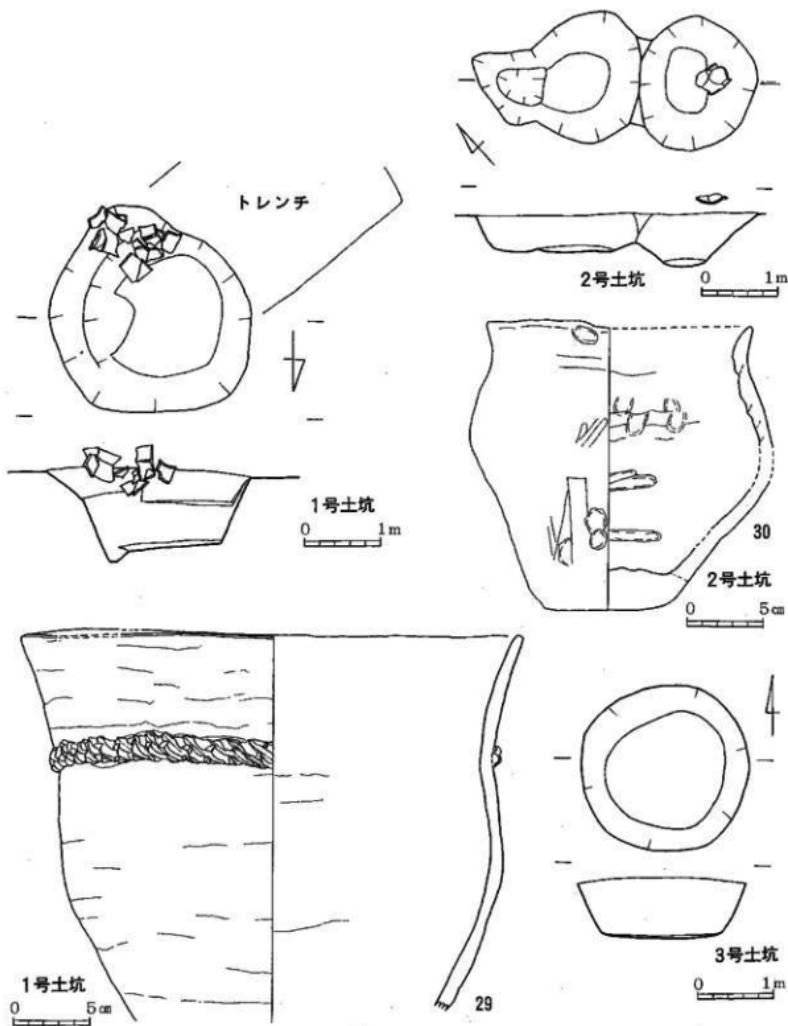
27は台石である。住居跡の南西角の土器集中箇所の中央よりで検出された。最大長23.6cm、最大幅18.9cm、最大厚み7.5cm、重量3.6kgを測る。中央よりやや下部にくぼみが見られる。

28は磁石と思われる。これも住居跡の南西角の土器集中箇所の台石よりはやや西側で検出された。最大長13.55cm、最大幅1.4cm、厚み2.45cm、重さ112.5gを測る。中央のくぼみ箇所は4面とも磨面である。

(2) 1号土坑(第10図)

1号土坑は調査区中央よりやや北側で検出された。最初、精査中に突帯をもつ甕形土器の口縁部が検出され、徐々に下げていくと円形のプランが確認された。試掘トレンチの角が一部土坑にかかっていたが特に影響はなかった。

1号土坑は直径が約130cmの円形の土坑である。床面はやや東に傾斜するが約80cmの円形プランを呈する。確認面からの深さが約60cmを測る。南側の確認面で土師器の甕形



第10図 一本松遺跡土坑遺構及び出土遺物実測図

土器が口縁部を下にする格好で検出された。底部を欠くが胴部下位からほぼ残存する。

29は1号土坑出土の土器である。口縁部に最大径を持ち長径が32.3cm、短径が31.6cmを測る。くびれた頸部に幅約2cm、厚み約0.5cmの突帯を貼付けX状の刻み目を施している。調整は内面は横ナデと丁寧なナデがあわせて施されている。外面は胴部下位で斜め方向のナデ、胴部中位から口縁部にかけて横ナデが施されている。なお、外面にはスヌが付着しており、内面には黒変が見られる。

(3) 2号土坑(第10図)

2号土坑は調査区の中央部よりやや北西部に位置する。1号土坑の北西約5mにある。

2号土坑は2つの土坑の切り合いからなる。北西側の土坑が長軸約130cm、短軸約87cm、確認面からの深さ約25cmのひょうたん形の土坑ある。一方南東側の土坑は長軸約90cm、短軸約78cm、確認面からの深さ約35cmの楕円形の土坑である。杉の根の伐根による攪乱のため2つの土坑の切り合い不明である。

南東側の土坑の南東角の確認面で甕形土器が横に倒れた状態で検出された。

30は胴部中位に最大径をもつ甕形土器で口縁部のくびれも緩やかであり広がりを見せない。口縁部から胴部のはば半分を欠く。口径約17.2cm、胴部最大径19.9cm、高さ19.3cm、底径8.2cmを測る。調整は内面が横ナデ、外面が底部がナデ、胴部から口縁部にかけて横方向、斜め方向、縦方向のナデが入れ乱れており全体的に雑な調整である。ただし、口縁部、胴部下部外面に指おさえの跡が見られる。また、肩部内面にははっきりとした粘土ひものあとや縦方向のナデのあとも見受けられる。

第3章 まとめ

今回の調査では、第2章でふれたように縄文時代の遺構遺物として精成浅鉢土器を中心に晩期の土器片が10点余りと同時期と思われる土坑1基が、古墳時代の遺構遺物として堅穴住居跡1軒とそれに伴う土師器、須恵器、石器類、さらに同時期と思われる土坑2基とそれぞれに土師器が検出された。

その中で特筆すべき成果として古墳時代の堅穴住居跡から出土した一連の土器群がある。

土器群は土師器の甕、壺、台付き壺、壺、高環、ミニチュア土器、須恵器の环身からなりほとんどの遺物が住居跡床面近くで検出されている。

甕は頸部のくびれがほとんどなくバケツ状の器形を呈するタイプ(1,3)とくびれが全くなく口縁部が内湾するタイプ(2,4)のものがある。底部は丸味を帯びた底部が主であるが平底

(4)も見られる。×状の刻み目を施した幅広の突帯を頸部に貼り付けたもの(1)も見られる。壺は比較的小型のもので口縁部が大きく外反し胴部上位に最大径を持ち下部が若干尖り気味で丸底の底部を有するタイプ(9)と短く外湾する口縁に橢円形状の胴部を持つタイプ(10)のものがある。

台付き塊は口縁部が外反し比較的短い高台が付く。(6, 7)

塊はやや深味のある丸底タイプのもの(12, 13, 15等)と浅めで口縁部が内湾する平底タイプのもの(17, 18等)が見られる。前者のタイプにはヘラミガキを施しているもの(15)や木の葉底のもの(13)もみられる。

高坏は坏部底面に稜を持ち大きく外反する坏部(23)と脚がやや中膨らみの柱状で裾部は中位で段を有し大きく外反する脚裾部(25)がある。同一個体と思われる。もう一個体分、湾状の坏部(22)と柱状の脚から裾部に外反する脚据部(24)が埋土中から検出された高坏も見られる。

これらの土器群の時期を考えるうえで重要な遺物として共伴して出土した須恵器坏身がある。須恵器坏身(26)は若干小ぶりで口縁部に段もち、立ち上がりも高く少し内傾を示す。底部は丸みをもつ。口縁部の立ち上がりなどの特徴から五世紀後葉と考えられる。

以上のことから一本松遺跡竪穴住居跡出土の土器群は五世紀後葉の時期といえる。

宮崎県の古墳時代の土師器の編年作業は現在、宮崎平野部を中心に精力的に行われているが、都城盆地を中心とした北諸県地方や加久藤盆地を中心とした西諸県地方の山間部では資料が少ないため編年作業が遅れている。今回の一本松遺跡出土の五世紀後葉の一括資料は北諸県地方の土師器編年の指標となる資料である。

図 版



遺跡遠景

図版 2



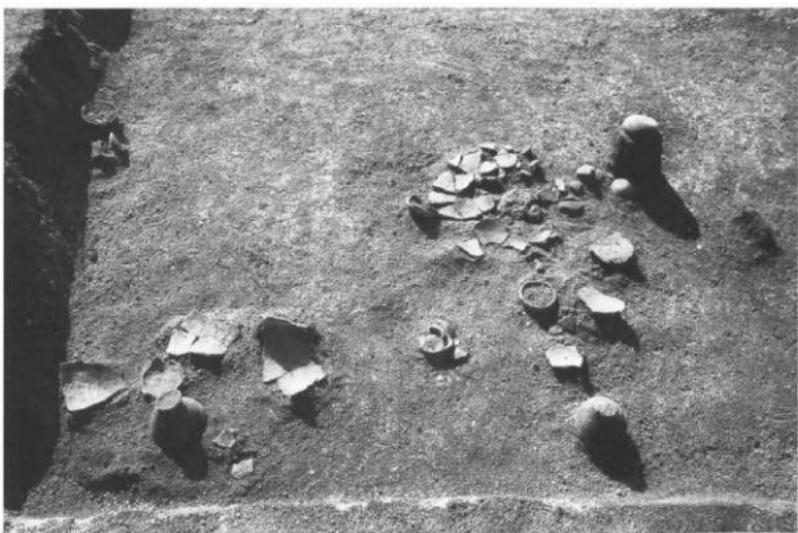
調査風景



1号住居跡



1号住居遺物出土状況(1)



1号住居遺物出土状況(2)



1号住居遺物出土状況(3)



1号土坑



2 号 土 坑



3 号 土 坑



縄文土器



1



2



3



4



5



6

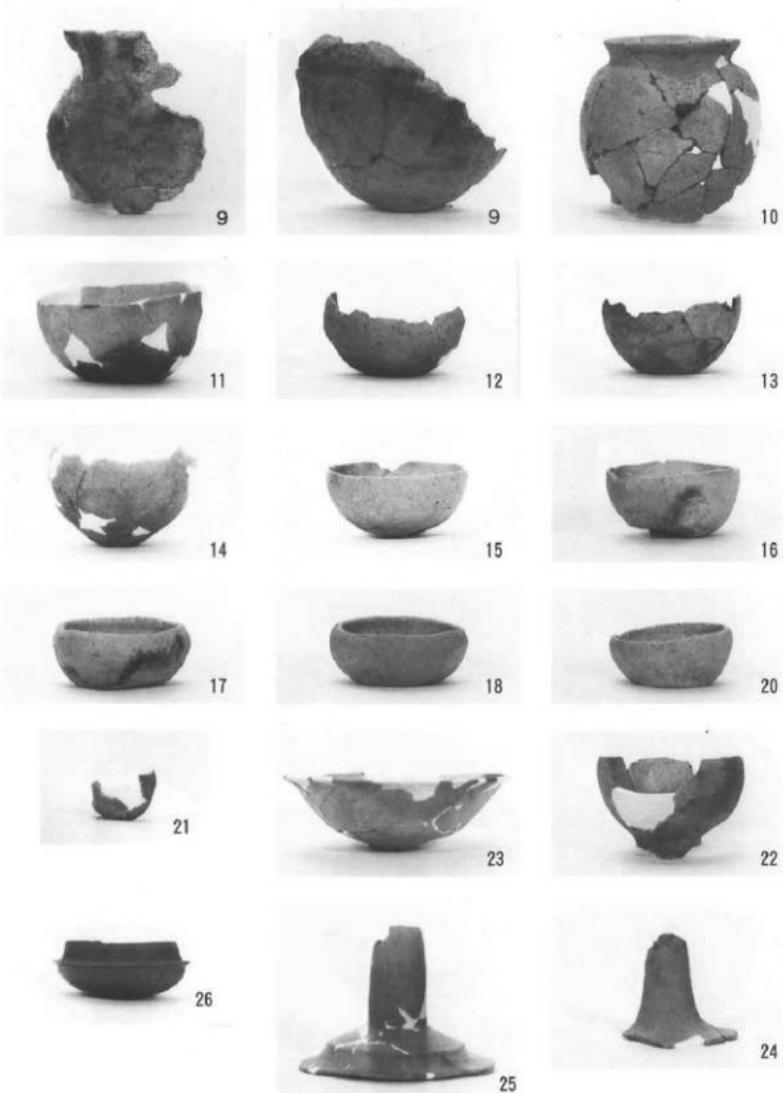


7



8

1号住居出土遺物（土師器1）



1号住居出土遺物（土師器2、須恵器）



27



28

1号住居出土遺物（石器）



29

1号土坑出土遺物



30

2号土坑出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっぽんまつ
書名	一本松遺跡
副書名	観音池公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	高城町文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	白谷健一・菅村和樹・永友良典
発行機関	高城町教育委員会
所在地	〒885-12 宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊46-2 TEL0986-58-2317
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな	いっぽんまつ
所収遺跡	一本松遺跡
ふりがな	みやざきけんきたもろかたぐんだかじょうちょうおおあざいしやま
所在地	宮崎県北諸県郡高城町大字石山4148番地ほか
市町村コード	453439
遺跡番号	4010
北緯°'	北緯 31° 49' 18"
東経°'	東経 131° 08' 21"
調査期間	1994.11.01~1994.12.02
調査原因	観音池公園整備事業(高城町こども村建設)に伴う事前調査
種別	集落
主な時代	縄文時代
主な遺構	土坑 1基
主な遺物	縄文土器・土師器・須恵器・台石・磁石
特記事項	

一本松遺跡発掘調査報告書
1996年3月

編集・発行 高城町教育委員会
〒885-12 宮崎県北諸県郡高城町
大字穂満坊46-2
TEL 0986-58-2317

印 刷 株式会社 文昌堂
〒885 宮崎県都城市
東町18街区1号
TEL 0986-22-1121